

カント『オプス・ポストゥムム』第一束、包み紙、 第一紙葉 - 第三紙葉の二頁 (AA XXI 3.1-32.8)

田 中 美 紀 子 ・ 内 田 浩 明 訳

Kant's *Opus postumum*, Ist fascicle, wrapp, sheet I - III(AA XXI 3.1-32.8)

Translated by TANAKA Mikiko and UCHIDA Hiroaki

【3】

第一束、包み紙¹ 一頁

超越論哲学は、一つの体系においてア priori に完結する理性の諸原理の総体である（認識の物質的なものが、諸原理の形式的なものだけに従って完全に表象されるのに対して、理性の諸原理は認識の形式的なものとしての一つの図式で設定される）。

超越論哲学に対しては、直観の個々のものだけに関わる経験哲学が対置している。

オルバースの惑星²

最高存在者はすべてを知るものであり、すべての善を欲するものである。

フォン・ロートの奨学金³

シュパンディーネンにて⁴

ヴィギランティウスという人物⁵

しかし、覚醒昏睡 (coma vigil) に陥っているような人ではない⁶

前者は商人かもしれない。後者は商売に向いておらず、一つの考えに取りつかれており、単に頑固で他の考えに向かうことも近づくこともできないし、自分を広げることもできない（前進も後退もできない）のである。

覚醒昏睡 Coma Vigil

60歳代、さらに70歳代を過ぎたあと、

80年目の私の歳⁷。

覚醒昏睡。絶え間ない不眠

胃の噴門における膨圧感の主観的な原理に従えば、この膨圧感はこのようにして主観的以外には考えられない。星天の幻覚に見舞われること⁸——これは単なる幻覚に過ぎないのか、それとも現実か。

包み紙、三頁⁹

空間と時間内の無限なもの。しかし無限の空間でも時間でも、そのどちらでもない [。]

超越論哲学は理念において両者を予料することである。——一人の神が存在する。

すなわち道徳的 - 実践的理性の理念の内に神は存在する。その理性は自分自身を常なる監視者とするのと同様に、また一つの原理に従って行為の指導者ともする。それはゾロアスターのようである。

I. カント

宇宙空間は物的世界の普遍的な基盤として考えられる。しかも空虚ではあるが、それ自体として存続する何かとして考えられる。

ゾロアスター。一つの感官的客体の中に結合されている、自然的〔実践理性〕と同時に道徳的実践理性の理想。

(I. カント)

主によって、神がこの場所で奇跡を行うことを禁じてください。フェリポー¹⁰

超越論哲学は神の存在についての仮説に何の指示も与えない。なぜならこの概念〔神の概念〕は熱狂的であるから。

人は自身で神の概念を作る。しかしこの概念が宇宙 (Universi) の精神として要請されないならば、超越論哲学も存在しないであろう。例えば経験を作るのは、薬の使用時にみられるように頻繁におこる類似の知覚の理解ではない。そうではなくて、原因と結果の関連の連鎖が経験を作るのである。

われわれは経験からではなく、まず経験的なものを経験のために規定しなければならない。薬理学のためには、なるほど特に経験的でなければならないが、しかしそのまま続けてはいけないのである。

【5】

経験から出発することはできないが、まず諸知覚から¹¹

諸知覚から、しかも諸知覚の結合という一つの原理に従って、経験を作ることはできる。しかも諸知覚を一つの体系に持ち込むことによって一つの経験を作ることができるのである。

ローマ皇帝による以外は、人は何もできない。¹²

ウィーンにおける頭蓋骨の研究¹³ 風刺詩 (クセーニエン)¹⁴

一つの哲学 一人の客の贈り物

哲学における諸理念の実在性 いくつかの羽から私のペンを作る。¹⁵

マジパン¹⁶はロシアの聖職者たちから伝わった——クリスマスの時のごちそう——復活祭へ向けて。それから復活祭の丸く平たい焼き菓子、(ひと塊の) レープクーヘン、ジンジャーブレッド¹⁷の時間

神、世界、人間の魂そして万物全体について。¹⁸

数学もその中で道具として理解される。

超越論哲学がなければ、われわれは自分で経験のために、われわれの認識のための手段やその他諸々のものを持ち出すことはないだろう。

概念による純粋理性の形式的なものとしての哲学ではなく、(神、世界、人間の魂)の理念の物質的なものとしての哲学、主体的にもまた客体的にも(両者を結合し、知性として表示された)哲学。

したがって、もし意志の自由〔途絶〕

純粋(哲学)——応用哲学

客体あるいは主体に関わる超越論哲学

その全体の総体、あるいはその体系の全体における純粋哲学。知性へ通じる学問への入り口(前庭)、ゾロアスター

神と世界という区分は許容されるか。

【6】

知識はすべて、a. 学問 b. 技術、 c. 叡智 (sapientia, Sophia) である。最後のものは、純粹に主観的なものである [。]

叡智を所有すること 叡智を知っていること 叡智者であること。

生理学、宇宙論 宇宙、神学 目的論 人間学 万有知識学 存在するものすべて

賛成の拍手喝采、承認の拍手喝采、拒否と(拒絶的)撤回要求の異議申し立て

(シェフナー氏¹⁹)

[胃の噴門あたりの膨圧感のための耐えられない苦痛]

学問——叡智——教え Doctrina としての両者

哲学は学問として理性の認識であるが、一つの学問として客観的であるか自己への教えとして主観的である。

サントメール No. 1 と ボロンゲロ²⁰

超越論哲学。神と世界についての教説

石英、長石、雲母の混合物。固まった空気(炭酸ガス)。ドルパットのモルゲンシュテルン博士²¹

(黄道沿いの地平線に見られる黄道光について) リヒテンベルク²²、ゾロアスター、ゾロアスター²³

教会のオルガンを弾く博士——ルター

ワインと女性たちと歌を愛さない人は、愚か者のままだ。

哲学は、人間にとって叡智を追い求めることである。それはいつも未完成である。

叡智の教説でさえ、人間にとって高尚すぎるのである。

超越論哲学は、理性自身が構想する全体を扱う理念である。

人間の栄養は、1. 液体の滋養 2. 小麦粉〔の製品〕の滋養 3. 肉の滋養である。

学問の理論である哲学は、純粹理性の認識の産物である。

【7】

学問と叡智。両方ともアприオリな原理による(に従う)ものである。

哲学——それは、一つの認識活動であり、その産物は、(手段としての)学問を目指すだけではなく、また目的そのものとしての叡智をも追求するが——それゆえ、(叡智は神自身に根拠を持つ何ものかとなるのである。)

包み紙、四頁

超越論哲学なしには、どのような仕方で、またどんな原理に従って体系としての構想を立てることができるかということは全く考えられない。その構想に従って、理性にとって関連する全体は一つの理性認識へと作り上げられうるのである。とはいっても、このことは、もし超越論哲学が理性的人間を自己自身を知る存在者にしようと欲するならば、必然的に起こるはずである。

必然的に(根源的に)物の現実存在を成り立たせるものは、超越論哲学に属する。

神聖な存在者としての神は、比較級も最上級も持ちえない。——神は一なるものでしかありえないのだから。超越論哲学は思惟された事物の命題の前を、それらの事物がひな形とするべき原型として先行するのである。

プラハのフオーグラー修道院長²⁴

フォン・ロートの奨学金

これを為すということを経験によって把握するのではなく、経験のための体系の全体において超越論的認

識によって叙述すること。

経験の上に何かを築くことはできない。むしろ、まずアприオリな法則としての経験の原理を知覚に基づいて築き、そしてそれから超越論哲学によって、超越論的に対象へと前進せねばならない。

各数字はすべて、ある大きさである。しかし逆は真ではない。量は、連続あるいは分断として観察される。

【8】

何かに付属しない、(独創的な *originaria*) 独立的な叡智が存在する (ゾロアスター)。

(経験から導出されない、) つまり経験のためであり、経験からではない純粹哲学の体系。

純粹哲学の体系の絶対的全体の表示。

すべてであり、一つであり、増加も改善もない一つの体系。

超越論哲学と並んで、その上にまだ超越的な哲学があるか。答えは、「ある」である。経験全般の可能にとって一つの純粹に蓋然的な哲学がある。

A. 超越論哲学は、すべての形式の総体である。その形式の中でアприオリな総合的認識は、自身を客体と表示する。しかも経験的原理を基礎に置くことなしに客体とする。概念による経験ではない。

B. 超越論哲学は、理性認識の体系の絶対的全体におけるアприオリな総合的理性認識の原理である。超越論哲学は、自分自身で思惟の対象の認識へ向かう準備練習をする学問であり、特に素材、つまりアприオリな思惟の形式的なものを体系の全体の中で叙述するのである。それゆえ数学は超越論哲学に属さない。

足跡ではなく、足探り。²⁵

切断された親指 (Pollex truncatus) ²⁶

ジプシー——インド人

【9】

神の現実存在

超越論哲学は、概念による総合的な認識の全体の体系についての学問である。それが形式的なものを内容から抽出する限りにおいて、その全体〔以下原文は読解不能〕

数学それ自体は道具として哲学的に扱うことができる。

クラヴィコード、チェンバロ、小型オルガン、パイプオルガン。

第一束、第一紙葉、一頁

すべての知識の限界への移行——神と世界

超越論哲学の理念の一つの総合的な体系の中で相互関係に置かれた存在者のすべて、神、そして世界²⁸

I

アприオリな概念による総合的な認識の体系の秩序の中で、すなわち超越論哲学の中で、その体系の完成への移行をなす原理は、次の二つの問いに含まれる超越論神学の原理である。

1.

神とは何か

2.

神は存在するのか

§

神の概念は、一人の人格の概念である。つまり諸権利を持つ存在者の概念であり、この人格に対しては、ほかの誰も権利を持っていない。そのような人格は一人だけ存在するかもしれないし、あるいはそのような

一つの種が存在するかもしれない（神あるいは神々が存在するかもしれない）にしても、しかし人格性と恣意を持っているにちがいない。このような性質がなければ、それは神々ではなく偶像idola、つまり事物になってしまうだろう。

【10】

そのような人格は、多数ではありえない。すなわち、もし一人の神が存在するなら、神はその人格においても同様に一人である。そして、多くの神々の概念は全く同一なものになるだろうから、複数の神々は存在しない。人が敬虔の念を抱く様々な神というのは、複数の神々となるだろうし、彼らを敬うことは迷信であり、妄信になるだろう。そして偶像崇拜は悪魔的であるだろう。

§

神と世界は、現実存在者の区分の要素と考えられる。その両方とも数的な一性（単一性）を自身の内に含んでいる。つまり、まさに複数の空間と複数の時間について語るができないように、複数の神と複数の世界について語ることはできないのである。なぜなら、これらすべての空間や時間は、一つの空間と一つの時間の諸部分にすぎないからである。

全く同じことが経験についても言える。経験の大きさを鑑みると、われわれは諸経験に依拠することはできず、絶対的統一性としての〔一つの〕経験に依拠することしかできないのである。なぜなら知覚の絶対的完全性は起こりえないからである。その理由は、諸知覚は経験的であり、そこでなんらかの欠陥があるという疑惑が残るであろうし、したがって、経験の可能性の一つの原理以外にアプリアリには何も残りえないからである。

神の概念においては一人の人格が思い浮かぶ。それは理性的な存在者であり、第一に諸権利を有するが、第二に義務によって規定されることはない。それに対して、〔神は〕他のすべての理性的存在者を義務の命令によって規定するのである。

【11】

道徳的 - 実践的理性の最高の客体を世界で実現すること——神と世界は理性の意欲の対象を作る。事物のすべて。最高存在者 *ens summum summa* [途絶] ²⁹

理性的存在者の全体としての世界の中に、道徳的 - 実践的理性の存在者もあり、したがって法的命法が存在し、これによって神もまた存在するのである。

そのような存在者は、純粹に思惟されたそれぞれの性質において完全なもの（最高存在、最高知、最高善）である。すべてこれらの概念は、対立判断において結合する。否定対立あるいは反対対立の実在的な区分としての神と世界。その世界は存在者すべてを含有するのである。

両者ともそれぞれ最大なものであり、前者〔神〕は程度により（質的に）最大と規定され、後者〔世界〕は大きさ、つまり空間により（量的に）最大と規定される。前者〔神〕は純粹理性の対象として、後者〔世界〕は感官の対象として規定される。両者とも無限である。前者〔世界〕³⁰は空間と時間における現象の大きさとして、後者〔神〕³¹は程度により（潜在的に *virtualiter*）（感官の対象物の数学的あるいは動力学的な大きさである）力についての無限な活動として無限である。——物自体としての最大なものあるいは現象としての最大なもの。

知覚する存在者、感情、悟性、人格を持ち、義務はないが権利を持つ存在者。

複数の世界が考えられないのと同じように、複数の神々も考えられない。むしろ一人の神と一つの世界しかない。この二つの理念は必然的に相互に依存している。最高存在、最高知、最高善 *Ens summum, summa Intelligentia, summum Bonum* (悟性、判断力、理性)。技巧的 - 実践的理性と道徳的 - 実践的理

性、そして両者を一つの理念の中で結びつける原理。——最高の叡智は理性によっては表現されえない。なぜなら理性は結論づける能力、つまり間接的に判断する能力においてのみ存するからである。

【12】

道徳的 - 実践的理性には、すべての人間の義務を神の命令として捉えるという定言命法がある。

技巧的 - 実践的理性には、巧妙さと技術がある。道徳的 - 実践的理性には義務がある。

実体としてのすべての存在者の総体は神と世界である。後者〔世界〕は、集合体として前者〔神〕に並置されているのではない。³²むしろ後者〔現実存在の世界〕が〔神の〕下に置かれて、一つの体系の中で単に技巧的のみでなく、道徳的 - 実践的に神と結合している。その前者〔神〕の特性が、一つの人格の性質を世界に賦与するのである。

（魂と肉体において）自分自身を愛することは普遍的に真であったり、あるいは容認されたりしない。しかし満足することなく自分に対して慈愛を持つことは真であり、容認されるだろう。しかし憎しみの場合はそうではない。

熱は放射状に伝わる（radians）のではない。そうではなくて物体が熱を吸収したり放出したりしているのであって、熱を蒸発させているのではない。

人格性とは諸権利、すなわち道徳的性質を持っている存在者の特性である。人格性が義務を有するにしても、あるいは人格性が義務を有している限りは、主体における人格性の意識は技巧的 - 実践的理性ではなく、道徳的 - 実践的理性に属する。人格性は技巧的 - 実践的理性だけではなく、道徳的 - 実践的理性も有しているのである。

スピノザ³³の最高存在者の理念、すなわち神の内にすべての超感性的な存在者を直観すること。道徳的 - 実践的理性。超越論的観念論。

最高存在者 *Ens summum* と存在者の中の存在者〔神〕 *ens entium*

理性は間接的に判断する悟性にすぎない。なぜなら規則と規則のもとでの包摂（規則の作用 *Casus*）、すなわち結果は、さらに多くのことを付け加えはしないからである。しかし、ただそのように呼ばれる推論あるいは結果がある。形式は内容を増大させない。

フォン・ヘス氏とクラウス教授。シュルツ氏あるいはペルシュケと執事 *Caplan*³⁴

【13】

第一束、第一紙葉、二頁

神の概念というと、超越論哲学はすべての活動的な特性に鑑みて最大の現実存在の実体を思い浮かべる。神はあらゆる感官の表象から独立した（純粹でアプリアリな理性的表象の）活動的な特性（実在性）を備え、自己自身を認識し、すべての真の目的にしたがって、人間の悟性、判断力、理性にかなった最高存在者（最高存在、最高知、最高善 *ens summum, summa Intelligentia, summum Bonum*）である。そしてその最高存在者は、感官の表象のすべての対象物の全体に対して活動的な関係にある。このように、相互に関係しあっている神と世界という区別がなされる。

両者〔神と世界〕は超越論的観念論によると、どちらも最高者と考えられる。そして超越論的観念論によれば、諸表象の対象の可能性は認識を構成する要素として先行し、（スピノザの概念による）主体的なものは神の内に見られるのであり、その神〔の理念〕を理性が自ら作り出すのである。そこで、課題は次のとおりである。第一に神とは何か（神の概念で何が理解されるのか）。第二の問は、神は存在するのか（なぜなら、所与の諸客体の全性は、その客体をすべて合わせて考えても、複数性は容認されないので矛盾なしには複数の神々などは考えられないからであり、そして、もし神が崇拜され、彼の法律が遵守されるならば、そ

のような複数の神々は偶像を表象するだろうからである)。

あらゆる人の心 (mens) の中に、一つの定言命法が存在する。(霊 anima ではなく) 心の中に、義務の厳格な命令が、違反者 (罪びと) に (幸福に値しないという) 非難を与え、感官的現象を度外視すると、単にこの尊厳が否定されるのみならず、違反者自身は確固たる宣言 (dictamen rationis 理性の言葉) によって非難される。——技巧的 - 実践的理性ではなく、道徳的 - 実践的理性が罪の赦免を与えたり、あるいは永劫の罰を下したりするのである。

自然は人間に対して専制君主的にふるまう。人間は狼のようにお互いに殺し合う。植物と動物は増殖してお互いに圧迫しあう。自然は植物や動物が必要とする涵養と備えを気にかけない。

【14】

戦争は長年にわたり [人間の] 創造活動が作り出して育ててきたものを破壊する。

自然と自由に対して根源的に普遍的に法律を与える存在者は神である。——神は最高存在であるだけでなく最高悟性であり、(神聖により) 善である。最高存在、最高知、最高善 *Ens summum, summa intelligentia, summum bonum*——神の理念そのものが、同時に神の存在の証明である。

思惟する存在者が有するすべての性質の中で最も重要なことは、自己を一人の人格として意識していることであり、人格により主体は超越論的観念論に従って、自己自身をアプリアリに客体へと構成する。自然科学の形而上学的原理から物理学への移行において、現象の中であるものとして所与されるのではなく、むしろ自分自身の創始者であり創造者であるところの存在として、人格の性質によって私はある。——人間としての私は、私にとって空間と時間における感官の対象であり、同時に悟性の対象でもある。——私は一人の人格である。したがって、権利を有する道徳的存在者である。

悟性 (Mens) は感官表象に左右されることなく直接的に結論する能力であり、神が持っていると考えられる。ただ間接的に推論によって判断する理性は、根源的ではなく、むしろ導出されたものである。——

慈愛の原理が幸福に適用されるのではなく、権利の原理が定言的に命令する。

力の先端を結ぶ、容認された循環について。

ある物体は、例えば硫黄のように、性質によれば単一な存在者 (ens simplex) でありうる。それに対してその産物は、燃焼により硫酸のような一つの結合体となりうる。

義務を負っているものは私の外にある。しかもそれは、世界に属する理性的主体として、私の外にある。世界は外的な感官的客体のみでなく、内的な感官的客体の全体である。

【15】

超越論的観念論は、認識の要素としての諸概念を、概念によるアプリアリな総合的認識の可能性の体系としての全体へと作る表象の仕方である。

まず道徳的 - 実践的理性、それから技巧的 - 実践的理性。神と世界。

われわれの悟性自身が創始者であるところの超越論的観念論。スピノザ。——すべてを神の内に見ること。³⁵ 定言命法。(定言命法に従って言い渡された) 神の命令としての私の義務の認識。

諸概念によるアプリアリな総合的命題を (定言命法と同様に) 理性に課する超越論的観念論。(理性の言葉 dictamen rationis) はわれわれが思惟すべきことではなく、われわれがなすべきことを言う。

自然科学の形而上学的原理から物理学への移行は、アプリアリな原理に従って起こる。しかもその移行は経験の可能性への移行である。経験は、手当たり次第にかき集められ (compilatio)、諸知覚を縫い合わせて作られうる集合体ではなく、絶対的な統一性である。(観察と実験 observatio et experimentum) は、統一性としての可能な経験の形式的な全体を前提する。

理性は、その形式の設計図とともに進む (形式は事物に存在を与える forma dat esse rei)。なぜなら理性

のみが必然性を備えているからである。スピノザ。認識の要素と認識による主体の規定の契機。(神の内すべてを見る)。

われわれは神の現実存在を証明できないが、そのような理念の原理に従って行動せざるをないし、神の命令として義務を受け容れざるをえない。

神の概念は、私の外にあって義務を課する一つの主体の概念である。

【16】 第一束、第二紙葉、一頁

2

神と世界

序説

I.

経験より先に(つまりアプリオリに)形式的に経験に先行し、経験全般の可能性の条件を含有する認識の体系は、自然と自由という二つの主幹に分かれる。そして、その両者とも理論的にも実践的にも扱われなければならない。そこで、技巧的 - 実践的理性あるいは道徳的 - 実践的理性とその理性の原理から産物が生じる。

傾向性と人倫
 本能 —— 悟性

II

自由概念は、権利概念と義務概念がその上に構築されうる基盤となるのではなく、むしろ逆に、義務概念が定言命法によって要請される自由概念の可能性の根拠を含んでいるのである。——世界における因果関係と自由を一致させる原理は、結局のところ不可能である。なぜなら、それは原因のない結果となるだろうから。

もし私が何かをなすべきなら、私はそれをなすことが可能でなければならない。そして絶対的に私に義務づけられることもまた、私にとって遂行可能でなければならない。

理性的な存在者の特質である、意志の自由全般(自然の衝動からの独立)を所有することは、原因の原理として直接的には証明されえないが、その自由が定言命法の可能性の根拠を含む限りは、結果によって間接的にのみ証明されうるのである。

【17】 III

その存在者にとって、人間の義務すべてが同時に彼の命令となるような存在者は、神である。神は義務が命令することをすべて欲するので、彼はすべてをなすことができるはずである。彼は権力によって最高存在者であり、諸権利を持っている存在としては、一人の人格という性質を有する生き生きとした神である。それは唯一の神であり、神に従い、神の権力の対象となるものも同様に一つの世界である。

IV

これらの諸概念はすべて、われわれ自らが作った最高存在者の理念に分析的に含まれているのである。しかし、超越論哲学の課題、つまり神は存在するののかという問いは未解決のままである。

V

宇宙神学

「あたかも神の命令としての」人間のあらゆる義務の原理を含む道徳的 - 実践的理性の対象がある。しかも、その原理のために人間の他に現実存在する別の実体を仮定することは許容されないのである。

VI

宇宙神学。スピノザによる直観と概念の結合の統一性の理念。

超越論哲学は、概念によるアプリアリな総合的認識の原理である。

1.) 自然科学の形而上学的原理から物理学への移行。 2) 物理学から超越論哲学への移行。 3. 超越論哲学から自然と自由の間の体系への移行。 4. 結論。神と世界の対抗関係におけるすべての事物の運動力の一般的結合について。

形而上学的哲学と形而上学

数学と物理学

空間と時間

神と世界。総合的な相互の関係において体系的に表象された超感性的なもの、物のすべて（宇宙 *universum*）における感官的存在者。

【18】

空間は存在者ではないし、時間もまた存在者ではない。両者は直観の形式にすぎない。しかも直観の主観的形式以外の何ものでもない。

原子論（分子哲学、原子と空虚）ではない。——充実した空間において、ある時は前進的な運動によって、あるときは振動的な運動によってその空間は貫通される。

様々な経験があるのではなくて、その経験のみがあり、その経験が教えるもの（経験の一つの形式がアプリアリに前提するもの）がある。しかし、おそらく観察と実験により、経験に関係する知覚はたくさんある。ヒポクラテス。³⁶

1) 形而上学、2 超越論哲学 3 自然学、4 一般動力学。最後のものは、運動力の法則を示し、それが空虚な空間において相互にいかに関係しているかを示すのである。³⁷

生命ある、肉体的な存在は魂を持っている（動物 *animal*）。それが一つの人格ならば、それはすなわち一人の人間的存在者である。

神と世界の理念の対立関係としての超越論哲学における純粹理性の体系の最高原理。世界が神であるというのではなく、あるいは神が世界内存在者（世界霊）というのでもない。むしろ、因果性の諸現象は空間と時間の中にある云々。

実体としての非物質的で知性的原理は、精神（*mens*）である。

動物。

自然は為す（*agit*）。人間は行う（*facit*）。目的を意識して作用する理性的主体は遂行する（*operator*）。感官にとって明らかではない知性的な原因は統制する（*dirigit*）。

神と世界——自由と自然——この自然は、人格性を伴った自然、あるいは野蛮な自然 *natura bruta* であり、知性的自然とは反対のものである。

理性による認識、理性にとっての法則、人格としての、あるいは感官的客体としての人間

自然の産物は空間と時間の内にある。自由の産物は道徳的 - 実践的理性の法則のもとにある（実践的理性の言葉 *dictamina rationis practicae*）。

【19】

空虚な空間を突き抜けるニュートンの万有引力。物体的実在性なしに、力は自身のためにはありえないから、空虚な空間自体はいかに知覚されるのか。

神は、自然の中に世界霊として存在するのではない。そうではなくて、人間理性の人格的な原理として神は存在する（最高存在、最高知、最高善 *ens summum, summa intelligentia, summum bonum*）。その原理は、一つの聖なる存在者の理念として、完全な自由と義務法則を定言的義務命法において結びつける。そして単に技巧的 - 実践的理性だけでなく道徳的 - 実践的理性も、超越論哲学の総合的統一性としての神と

世界という理念の中で合致するのである。

...³⁸そして経験的人格性（彼は自分の足の下に深い雷雲を見て、かすれた雷を踏みにじる *altos videt sub pedibus nimbos et rauca tonitrua calcat*）³⁹

神は世界霊ではない。すべての事物を神の内に見るというスピノザの神と人間の概念は、熱狂的である（狂信的な概念 *conceptus fantaticus*）。

第一束、第二紙葉、二頁

宇宙神学

神と世界。技巧的 - 理論的理性と道徳的 - 実践的理性からなる超越論哲学の一つの体系

神の概念は世界存在者の最上の原因として、また一人の人格としての存在者の概念である。一人の世界存在者の自由がいかに可能かということは、直接には証明されない。もし神の概念が容認されるならば、神の概念においてのみ、その証明は実行可能であろう。

I

神

定言命法は、まずは自由概念に通じる。その概念については、われわれは理性的存在者のこの特性の可能性の他には推測することはできない。この命令は神的なものである（不可侵の命令 *praecepta 【20】 inviolabilia*）。すなわち、その命令に容赦などはなく、その命令に違反した場合は、人間独自の理性によって永劫の罰の判決が下される。それはちょうどその判決を執行する道徳的権威〔神〕によってその判決が下されたのと同様なのである。

純粹理性の体系における進歩の最高の段階

神と世界

論理的で実在的な相互関係において表象された全超感性的な対象と全感性的対象*

これらの諸表象は単に概念でなく、同時に概念による総合的なアプリアリな法則に素材を与える理念である。したがってそれらの理念は単に形而上学から生じるのではなく、超越論哲学を根拠づけるのである。

両者〔神と世界〕のどちらもが最大を含み、どちらもが唯一でありうる。「一人の神が存在し、一つの世界が存在する。」

*論理的な関係とは、同一性と多様性の関係である。実在的な関係とは、諸主体の因果性に関しての作用と反作用の関係である。

a

最初の対象〔神〕は人格性によって、つまり自己の根源的な原因であるという自由の崇高な性質によって、事物としての物を超越する。その特性や能力の可能性は直接的には全く証明できないし、説明もできないが、しかし間接的には定言命法における矛盾なき理性の言葉によってその実在性は完全に証明される。

普遍的に効力を持つ命令としての (*tanquam*)、つまり最高に神聖で権力のある立法者の特性を持った命令としての、すべての人間の義務を認識する原理は、思惟された主体を唯一の権威ある存在者の階級へと高める。つまり、われわれが神自身を想起できるという理念から、そのような存在者の現実存在ではないが、しかしそのような存在者と同様なものの存在を結論づけるのである。またそのようなもの（理性の言葉 *dictamen rationis*）が、あたかも実体においてわれわれの存在と結合しているのと同じような強さで、同じ結論が導かれるのである。

【21】

第一束、第一紙葉、三頁

そして、「神は存在する」という宇宙神学的命題は、技巧的 - 実践的観点から証明されないにしても、道徳的 - 実践的關係において、あたかも最高存在者について語られているかのように崇められ、従われなければならない。そしてそのような存在者の現象を信じること、あるいはそれをただ望むことは、狂信的な妄想であるだろう。それは理念を知覚とみなすことである。

結局、次のことが言えるだろう。「複数の神々が存在するのではない。複数の世界が存在するのではない。」そうではなくて、実践的 - 規定的原理としての理性において、「一つの世界が存在し、一人の神が存在するのである」と。

道徳的 - 実践的理性の事実、すなわち定言命法がある。それは自然に対して、法則に従う自由を命令し、それによって自由自身が自由の可能性の原理を説明するのである。そして、命令する主体は神である。

この命令する存在者は人間とは違うものとして人間の外にある実体ではなく、あらゆる感官的存在者の総体（世界の全体）としての世界と対をなすものとして、すなわち空間と時間において世界と対をなすものとして、純粹直観におけるアプリアリな絶対的統一性として表象される。そして、絶対的な統一性としての世界は、世界の多様性を理性によってアプリアリに結合する超感性的な原理としての神と同様にアプリアリに想起される。——この二つの理想は、実践的実在性を備えているのである。

可能なすべての感官的客体の全体を自身の中に含んでいる存在者が、世界である [すべての人間の義務が同時にその命令であるという関係にある存在者は、神である] [。]

神と世界は、感官的表象に基づく道徳的 - 実践的理性と技巧的 - 実践的理性の理念である。そのうちの前者は人格性の述語であり、後者は []⁴⁰を自身の内に含んでいる。しかし、両者は一緒になって、一つの原理において相互に関連しあいながら、一つの体系をなす。両者は私の思惟の外にある実体ではなくて、思考である。その思考によりわれわれは、概念に基づくアプリアリな総合的認識によって客体そのものを自ら作り出すのであり、われわれが主体的にその思惟された客体の自己創造者である。

【22】

原因の原理である運動力は、神、世界、そして世界の中の諸運動力としての直観と感情の主体である私の表象を含んでいる。神と世界の両者は一つの概念において結びつけられ、その運動力は空間と時間における自然の直観、感情、そして技巧的 - 実践的理性と道徳的 - 実践的理性を自由によって一つの体系へと結合する自発性を含むのである⁴¹（自発性と受容性の両者は、一つの体系において結合される）。神、世界、そしてこの両方の客体を一つの主体へと結合する私。——直観、感情、そして欲求能力。——神、世界（私の外にある両者）そして、自由によって両者を結合する理性主体。（実体でなく）——スピノザの超越論的観念論は、文字通りにとれば超感性的、つまり概念のない客体である。それは、主体的なものを客体的なものとして表象するのである。

神と世界はその理念に従えば、分析的（同一的）統一にはない、二つの同種の存在者である。だが、超越論哲学の原理に従えば、両者は総合的統一において考えられうるかもしれない。しかし、いかにしてこの結合に実在性が付け加えられるのか。

万物、すなわち宇宙 (Universum) は神と世界を含む。世界は感官的存在者の全体を意味する。

さてここに、二つの異種の事物の関係がある。それは、なるほど作用因の関係（因果関係 *nexus causalis*）ではあるが、存在者のすべてが思惟される時は、その関係は客観的ではなく、主観的である（事物にではなく、思惟する主体の中に因果関係はある）。最高善（根源的なものと導出されたもの）。

二つの原理、すなわち道徳的 - 実践的理性の原理と（数学も属する）技巧的 - 理論的理性は、一緒に

なって完全な統一性をなす。

一つの実体を神的なものとして認識するのではなく、人間のすべての義務を神のものとして認識すること。神は義務の定言命法の主体である。それゆえ、この義務は神の命法と呼ばれる。

神と世界へ分けることは分析的（論理的）ではなく、総合的すなわち現実反対によって総合的である。

【23】

神と世界と、両者を結合する主体の概念という三つの原理がある。その主体は、理性がかの超越論的統一を自らなすことによって、この概念に総合的統一を（アプリアリに）もたらす。エーネジデムス⁴²。——神、世界、そして私。神、世界、そしてこの二者を結合するものとしての人間の精神。定言命法を伴った道徳的 - 実践的理性。

神と世界の結合を一つの原理のもとで根拠づける知的主体。

最高の自然

最高の自由

最高善

〔 浄福
至福 〕

1. 神は存在するか、という問い。そのような思考の客体は主体の外にある実体としては証明不可能である。むしろそれは思惟にすぎない。

第一束、第二紙葉、二頁（余白）⁴³

感官的表象における純粹に主観的なものは感情である。

超越論哲学の最高の立場⁴⁴とは、神と世界を一つ原理のもとで総合的に統一するものである。

自然と自由

技巧的 - 実践的理性あるいは道徳的 - 実践的理性の原理と法則の相違。

自由の概念は義務の定言命法から生じる。そのように欲して、そのように命令する。理性に代わり、意志が適用される *Sic volo sic iubeo stet pro ratione voluntas*。⁴⁵

自由としてのそのような性格の可能性は、超越論哲学においては分析的にではなく、総合的に生じる。そして、これが自由の法則である。

思惟する主体は、自分のために空間と時間における可能な経験の対象としての世界をも創造する。この対象は、一つの世界にすぎないのである。——この世界に、例えば引力と斥力という運動力が備わっている。そのような運動力がなければ何の知覚も成り立たないだろう。つまり、それ〔世界〕はただ形式的なものにすぎないのである〔。〕

【24】

世界は一つの空間と一つの時間における事物の総体（複合体 *complexus*）である。しかも、空間も時間も現象において客観的に与えられた何かではない。神において多様なものを結合する原理がある限り、神は自由の理性概念であり、それは一人の人格についてのみ言えることである。義務概念。義務概念を越えて見据える自由の概念は、世界における人間の人格の概念であり、また神の人格の概念でもある。——世界に関しては技巧的 - 実践的概念であり、神に関しては道徳的 - 実践的概念である。

複数の世界が存在するのではないように、複数の神々が存在するのではない。そうでなくて、一人の神と一つの世界がある。超越論的宇宙論と超越論的神学（宇宙神学）。最高存在者（*ens summum*）ではなく、すべての存在者の中の存在者（*ens entium*）。

物のすべて (omnitude) は、それゆえ統一された客体の全体としてはまだ表象されない (配分的あるいは集合的な統一、つまり論理的あるいは実在的統一)。(数学的)現象としての直観 (空間と時間)において。

視覚が光よりも先にある場合、そして前者〔視覚〕が空間で働かず、後者〔光〕もない時には、光は引力と類推して考えられる。空虚な空間において光るもの。二重の反射の概念。⁴⁶

視覚は手で触れることと同様に反発的である。

第一束、第二紙葉、四頁

神、世界、そして世界の中での、つまり空間と時間の中での私の存在の意識

最初のもは可想体であり、第二は現象体、第三は主体が自己の人格性の意識へ向かう自己決定の因果性、すなわち存在者の全体の関係における自由の因果性

【25】

I

神は存在する

私の中には、私に対して因果関係 (nexus effectivus) にあり、私とは異なった存在者が存在する (それが為し、行ない、遂行する agit, facit, operatur)。それは、みずから自由であり、したがって空間と時間における自然の法則に左右されることなく、私を内的に審判する (正当化するか、あるいは罰する)。そして人間としての私がこの存在者そのものであり、私の外にあるような実体ではない。全く奇妙なことだが、因果性は (自然の必然性としてではなく) 自由な行動への規定である。

この説明不可能な内的特性は、事実によって、すなわち定言的義務命法 (目的因 nexus finalis) によって自己を発見する。神は世界の作用因として、肯定的あるいは否定的 (命令と禁止) かもしれない*。自由によってのみ可能な、強制における人間の精神 (mens) [。] しかし、自己活動性の原理に従って直接判断される場合は、自由による自己活動性の法則を想像することは全く不可能である。なぜなら自己活動のあらゆる行為は、原因なき結果になってしまうだろうからである。だからこのことに対してしばしば反駁されたのである。しかし、自由による自己活動性は矛盾なく真である定言命法によって間接的に**容認されうるし、容認されねばならない。そして神の命令としての人間の義務すべてに、自由による自己活動性は服従せねばならないのである。

*十戒における神に見られるように。

**証明されるべきものの結果から原因が明白に推論されるなら、その証明の仕方あるいは検証は間接的である。

選択意志の自由は、自然の存在者としての客体には付与されえない一つの事実である。しかし、その事実は世界における原因の原理であり、原因のない結果はその事実の概念の中にすでに含まれているように見える。【26】人格として絶対的に命令すること (定言命法)、つまりさながら人格としての神として命令すること。

すべての認識は、思惟し、直観し、知覚し、経験において認識するという能力から成り立つ。そして、その認識は〔直観の産物〕⁴⁷である。それは、技巧的 - 実践的理性あるいは道徳的 - 実践的理性の体系において、形而上学のためではなく超越論哲学のための作用因としての直観の産物である。超越論哲学は、直観によるのだけではなく、概念によるアプリアリな総合的原理を含み、そのような原理の一本の系統樹を含む。その系統樹は枝分かれする根を含み、一本の認識の木⁴⁸を含むのである。それは、全く異なる種類の認識 (自然と自由——世界と神) であり、主観的に人間理性において絶対的な全体としての認識である。その全体は一つの自然体系ではなく、思惟の体系である。

統一性としての、経験における汎通的な自己規定は現存在である。しかし神〔による規定〕ではない。

道徳的実践的理性の言葉はすべて神のもの（神聖な言葉 *dictamina sacrosancta*）である。なぜならその言葉は道徳的命法（定言命法）を含むし、まさにそれによってのみ自由の実在性を証明するのであるから。しかしそれは、その存在が証明されるような実体としての神ではない。

理性が自分自身に対して制定する法の下での自由。超越論哲学における定言命法。

形而上学的原理から超越論哲学への移行。

人間の内にあるものが人間の外にある何かとして表象されて、人間の思惟の産物が事物自体（実体）として表象されるなら、その概念は狂信的である。

原理は理性固有の言葉であり、共通の法である（*Principia sunt dictamina rationis propriae: leges communes*）。

【27】 第一束 第三紙葉 一頁

3

三つの節における超越論哲学の体系

神、世界、〔すなわち〕宇宙 *universum*、そして私自身、道徳的存在者としての人間

神、世界、そして世界の住人、〔すなわち〕世界における人間。

神、世界、そしてこの両者を実在的関係において相互に思惟するもの、〔すなわち〕理性的世界存在者としての主体。

判断における中項（繫辞） *medius terminus (copula)* は、ここでは判断する主体（思惟する世界存在者、世界における人間）である。主語、述語、繫辞。

I

神

§ 1

そのような存在者〔神〕の概念は、一つの実体という概念、すなわち私の思惟〔作用〕から独立して現実存在する物という概念ではなく、むしろ理念（自己創造）、思考物である。つまり、自己自身を思考物へと構成する理性の思考上の存在 *ens rationis* である。その理性は超越論哲学の諸原理に従いアプリアリな総合的命題を定立し、また理想でもある。その理想については、そのような対象が現実存在するかどうかということは、問題にならないし問題にもなりえない。なぜならその概念は超越的だからである。

§ 2

しかし、道徳的 - 実践的理性において義務の原理、すなわち定言命法が存在するが、定言命法に従って理性は感性のあらゆる衝動、つまり自然を端的に（無条件に）支配する。しかも、自然と対立しながら自然を支配する。それは世界における作用であり、原因なしに作用するよう見える。つまり自由に基づく諸々の行為はあるが、【28】われわれはやはりその行為に強制的に規定されているのである。原因性のそうしたあり方は、自由の可能性もまた端的に理解不可能であるように、自己矛盾しているよう見える（我かく欲し、我かく命ず、原因の代わりに意志よあれ *sic volo sic iubeo stet pro ratione voluntas*）⁴⁹。そしてこのようなあらゆる自然の影響と指示からの自由と独立性において、当然のことながら人間のものではない神性〔が表象される〕⁵⁰。というのも、神性とは最高の思惟可能なものであり、同時に最高に権威ある〔 〕⁵¹

だからである。

神性はけっして感官の客体、すなわち人格ではなく、自分自身で思惟するものである。与えられうるものではなく、思惟されうるもの *non dabile sed cogitabile*⁵²。

§ 3

この原理に基づいてすべての人間の義務は、同時に神の命令として言い渡される。たとえ理性を規定する、そのような原因が実体としては想定されないにしても、神の命令の形式的なものに従って、すべての人間の義務は言い渡されるのである。そして、ひとが命令の神性を人間の理性の根底に据えるか、それともまたそのような人格の根底に据えるかどうかは、実践的に考えても完全に同じことである。なぜならその差異は、認識を拡張する教説の違いよりもむしろ言葉の使い方の違いだからである*。

*神の命令としてという表現で、〔人間の義務は〕神の命令と（同様に *tanquam*）、あるいはまた（まさに神の命令として *ceu*）〔ということの意味することができる。〕⁵³

§ 4

純粹理性の批判は哲学と数学とに分けられる。

前者〔哲学〕はさらに形而上学と超越論哲学とに分けられる。

最後のもの〔超越論哲学〕は理論理性と実践理性の諸理念の哲学へと分けられる。——自由と自然。

私、人間。現象体、可想体。現象における対象と物自体。

〔分析的かそれとも総合的〔なもの〕（全体かそれとも普遍 *omnia, aut universum*）と見なされる存在者のすべて〕

【29】

思惟作用の客体は、a) 存在者、b) 事柄、c) 人格である。——

最高のものは、最高存在、——最高知、最高善 *ens summum*, ——*summa intelligentia, summum bonum*

いかにして自由の概念は可能であるのか。定言的に命令する義務の命法によってのみ〔可能である〕。

三つの人格としての神ではなく、力にしたがって三重の人格をなす神。三つの人格ならば多神教 *Polytheism* になるだろう。

世界質料はけっして生成も消滅もしない。

神の理念はわれわれに何を強要するのか。いかなる経験概念でもいかなる形而上学でもない。——アプリアナこの概念を供するのは超越論哲学である。

義務の概念。しかし、この義務の概念は原因性の自由の概念を前提するのであって、その自由の可能性は説明されるのではなく、むしろ定言命法の力に基づいている。

神、世界、そして人格としての人間、すなわちこれらの概念〔神と世界〕を統一する存在者としての人間。理念は自己創造された、思惟力の主観的原理である。作り物ではなく、思惟されたものである。

神は世界霊ではない。

世界 *mundus* ではなく宇宙 *universum* を一にするもの（精神 *mens*）、それが人格性を有するかぎり。

世界の複数性 *Pluralitas Mundorum* ではなく、宇宙の単一性 *Unitas Universi*〔世界は複数であるが、宇宙は単一である〕

すべて（宇宙 *universum*）は、複数存在しうる世界から区別される。前者は理念に、そして超越論哲学に属する。

全体としての物のすべて〔万物〕、宇宙 *Universum*

神と世界、そして両者を思惟する人間の精神 *Mens*

思惟力が先行しなければならない〔。〕

存在者のすべて (*universum*)、神と世界

思惟者よりも思想が先行するのだろうか。視る者よりも光が先行するのだろうか。引力

三種または四種の非物質性が存在するかどうか〔ということ〕。それは、(生けるものの *Animantis*) 精気 *Spiritus*、魂の精気と精神の精気 *Animae et Mentis* (*Dido*)。⁵⁴

【30】

第一束、第三紙葉、二頁

存在者のすべて〔すなわち〕宇宙。これは神と〔 〕⁵⁵に分けられる。

§ 5

自由の概念の实在性は、それゆえ直接的に(無媒介的に)明示され、証明されることはできない。むしろ、ある媒介原理を通して間接的にのみ明示され、証明されることができる。そして同様に人間の道徳的 - 実践的理性において、われわれの行為の規定として「神は存在する」という命題は、明示され証明されるが、また、すべての人間の義務の認識においては、われわれの使命とその素質に鑑みて、「われわれは根源的に神の子孫である」ということが(あたかも)神の命令として明示され、証明されるのである。そしてわれわれ自身にとって理解不可能な自由の能力は、〔 〕の領域の外にわれわれを無限に〔 〕⁵⁶

§ 6

しかし知覚において与えられうるものではなく、思惟されうるもの(*cogitabile, non dabile*)は単なる理念であり、その理念の最大のものと言え、それは理想である。人格としての最高の理想は、(それはただ一つしかありえないのだが)神である。

§ 7

世界(それが実体的に考えられると自然とも呼ばれる)は、感官対象の全体(宇宙 *universum*、物の全体 *universitas rerum*)である。これらの対象は、人格に対して事物である。

それゆえ上の意味に解するならば、一なる世界が存在するのみである。なぜなら、すべてのもの〔の全体〕は一なるものにすぎないのだから。世界の多数性(世界の複数性 *pluralitas mundorum*)は、異なった形式と実在的關係(空間と時間におけるそれらの作用結果)とともに名状できないほど数多く存在するかもしれない多くの体系の数多性を意味する。——神は世界の住人ではなく、〔世界の〕所有者である。(感官存在者としての)前者〔世界の住人〕ならば、神は自然に属している世界霊になってしまうだろう。

【31】

§ 8

しかし、こうした関係において両者を絶対的な全体へ結合する媒介手段が存在しなければならない。それは、自然存在者としての人間であり、また同時に感官的原理と超感性的原理とを結合するために人格性を有する人間である〔。〕

§ 9

かのアプリアリにわれわれの中に存している全体を分析し、その全体の形式的なものを自分固有の理性か

ら開発することによって、表象能力のどのような規定から体系は生じて、その体系の要素の完全性は形成されうるのか。——リヒテンベルク——エーネジデムス⁵⁷。純粹理性の建築術。(まだ実践的ではない) 思弁的哲学のこうした理性の最高の立場、物見やぐら (Specula) について——手で触れたり、手に取って確かめたりするのではなく、遠くで観照するために高い所から経験という平らな土地を監視すること。——技術的 – 実践的理性と道徳的 – 実践的理性の区別 (熟練、伶俐、思慮、観照と手で触ること)。

神、世界、そして世界市民的 (Cosmopolita) 人格としての人間 (道徳的存在者)、自らの自由を自覚する感官的存在者 (世界の住人)、世界における理性的な感官的存在者。

神、世界、そして人間、世界における感性的 – 実践的存在者 (建築術的)

アプリアリな世界認識の要素を自身で作出す天体観測者 (Cosmotheoros)。同時に世界の住人としての彼は、世界認識の要素から世界観照を理念の中で創り出す。

断片的な集合と (一つの原理に基づく) 体系的な集合との相違。その相違から経験の可能性も生じるが、その可能性は単なる多数の諸知覚にすぎないものをいつも経験へと引き上げるのである。

【32】

諸目的に関する実践理性の教説においては、諸部分から全体ではなく、全体の理念から諸部分へ分析的に作用することは必然的である。

空間と時間における世界と空虚な空間における運動力、その運動力は中心物体が止まれば無である。

第二に原因のない結果としての自由。

いまだ実体ではない思惟能力

外面性

訳者注

- 1 第一束を包んでいた包み紙は、1801年5月22日にケーニヒスベルク大学で開催されたプロイセンの国務大臣故フォン・ロート (Jakob Friedrich von Rohd, 1701-1784) のための記念講演会への招待状 (プログラム) を転用したものであり、二つ折り半載紙の4ページからなる (坂部恵『坂部恵集 I、生成するカント像』に収録の「最晩年の『移行』」、2006、岩波書店、p. 275参照)。講演を行ったのは哲学部長ヴァルト (Samuel Gottlieb Wald、神学者、古代ギリシャ語教授)。このプログラムの二頁目は白紙であったが、あとのページには式次第などが印刷されており、カントはその行間やページの余白に自分の覚え書きを書き残した。
- 2 ドイツの医者、天文学者である Heinrich Wilhelm Matthäus Olbers を指す。1802年3月に小惑星パラスを発見した (Adickes, Erich: *Kants Opus postumum*, Berlin, 1920, p. 152, 西訳 p. 748, 注135参照)。
- 3 フォン・ロートはケーニヒスベルクのシュパンディーネンの出身。カントは1782年10月、彼のもとでの食事に招待された (1782年10月22日付のヨハン・フリートリヒ・ライヒャルト宛のカントの手紙参照、AA XI 290)。
- 4 ドイツ語でスパンディーネンと言われた地区は、ロシア語でスヴォーロヴォと言ひ、カリーニングラードのモスコフスキー地区にある住宅街を指す。
- 5 ヴィギランティウスはカントのかつての教え子であり友人でもある Johann Friedrich Vigilantius (1757-1823) のことである。
- 6 カントは“coma vigil” (覚醒昏睡) を1行上のヴィギランティウスの名前に掛けて言葉遊びをしている。
- 7 この覚え書きは、1803年4月22日のカントの79歳の誕生日以降に書かれたものと推測される。すなわち満79歳を迎えて人生80年目に入ったと言う意味であろう。Adickes, 1920, p. 153 参照。
- 8 カントは1804年2月に逝去したが、この第一束の包み紙に覚え書きを書きつけたのはその前年の1803年と推測されている。当時カントは病気のせいで幻覚に悩まされていたらしい。
- 9 包み紙の二頁目は白紙で、頁の上部にかっちりした文字で「第一束」と書かれているのみである。
- 10 原文では“Phesipeau”となっているが、Jean- Frédéric Phélypeaux (1701-1781) を指すと思われる。彼はフラン

スの政治家であり、海軍大臣、国務大臣などを歴任した（西訳p. 750、注140、伊訳p. 396、注3、仏訳p. 360、注620参照）。

- 11 この後は途絶しているが、次の行の“Wahrnehmungen”に繋げて読むことができるだろう。
- 12 ローマ皇帝とはマルクス・アウレリウスのことか（西訳p. 750、注141）。
- 13 骨相学のことである。ウィーンのドイツ人医師フランツ・ヨゼフ・ガル（1758-1828）は脳の解剖を行い、生理学を研究したが、1802年ウィーンから追放された。
- 14 ゲーテとシラーによる風刺詩。
- 15 最後の部分は読解不能。
- 16 粉末状に挽いたアーモンドと砂糖を混ぜて練り合わせて固めたお菓子。
- 17 復活祭の時期に食べる焼き菓子のさまざまな呼び方。形や大きさはいろいろであるが、小麦粉、蜂蜜、ナッツ、オレンジピール、レーズン、ショウガ、アニスなどを混ぜて練りこんだ生地から作られる。
- 18 クリシチアン・ヴォルフの本のタイトルを写したもの。西訳p. 751、注144参照。
- 19 Johann Georg Scheffner（1736-1820）はカントの友人。1803年4月22日、カントの最後の誕生日に招待された（西訳p. 751、注145参照）。
- 20 両方ともカントが使用していた粉末状のかき煙草の銘柄。“Bolonger”は“Bolongaro”のことか（西訳p. 751、注146参照）。
- 21 ドルパット（Dörpat, Dorpat）は現エストニアの都市タルトゥ（Tartu）のドイツ語での古い呼称（Adickes, 1920, p. 152、西訳p. 752、注147参照）。K. モルゲンシュテルン（1770-1852）はハレで古典学を教えていたが、1802年にドルパットの教授に招聘され、同年10月7日（Vorländer, Karl: *Immanuel Kant. Der Mann und das Werk*, Wiesbaden, 2003, II, p. 324）あるいは11月7日（Adickes, 1920, p. 152）にダンツィッヒからドルパットへの移動の途中でケーニヒスベルクのカントを訪れた（伊訳p. 398、注3参照）。
- 22 リヒテンベルク（Georg Christoph Lichtenberg, 1742-1799）は、ゲッティンゲン大学の物理学の教授。いわゆるリヒテンベルク図形の発見者として知られるが、現在ではむしろアフォリズム作家として有名である。そのアフォリズムは彼自身が『控え帖』（Sudelbücher）と名づけていたノートに収められており、彼の死後に遺族が1801年に公刊した『リヒテンベルクの雑篇集』（*Lichtenbergs Vermischte Schriften*）で読むことができる。その第二巻はカントの蔵書目録（Warda, Arthur: *Immanuel Kants Bücher*, Berlin 1922, p. 19.）にも見られ、『オプス・ポストウムム』におけるリヒテンベルクへの言及の多くはそれに基づいていると考えられる。Adickes, 1920, pp. 149-50も参照。
- 23 「ゾロアスター」が二度続くが、二つの目の「ゾロアスター」は消されて、その前に新たに「ゾロアスター」が加筆された（アカデミー版編者の校訂注参照）。
- 24 G. J. Vogler（1749-1814）はプラハの音響学の教授。1801年11月9日、彼はプラハで就任講演を行った（Adickes, 1920 p. 152）。本稿【6】に出てくる「教会のオルガンを弾く博士」は、フォークラーのことかもしれないという（西訳p. 752、注148）。
- 25 ドイツ語で“Fußtappen”は「よたよた歩くこと」であるが、ここでカントは『啓蒙について』で用いた“Herumtappen”「手探りでさがす」をもじった表現を使っている（西訳p. 752、注149）。
- 26 懲役を免れようとするものは、自ら親指の先を切断したという。つまり、その行動は懲役拒否を意味する。
- 27 第一束には12枚の二つ折り半截紙（Foliobogen）が纏められており、したがってそれぞれの紙葉は4ページに区切られることになる。
- 28 カントが刊行を計画していた新しい著書の主題と副題をメモしたものだと考えられる（西訳p. 726、注34参照）。以下にその著書の内容が章、節等に区切られて書き続けられている。その過程で主題はさまざまに書き換えられたのである。
- 29 “summa”「最高の」という形容詞の女性形のあとに“intelligentia”が続くと考えられる（西訳p. 635参照）。
- 30 「後者」すなわち「世界」の間違いか（アカデミー版編者の校訂注参照）。
- 31 「前者」すなわち「神」の間違いか（アカデミー版編者の校訂注参照）。
- 32 アカデミー版は「前者〔神〕は、集合体として後者〔世界〕に並び置かれているのではない」となっているが、カントの手稿に間違いがあったと思われるので、上のように訳した（英訳p. 220参照）。仏語訳では原文のまま、「神は、存在においては世界の下に置かれる」と訳している。

- 33 スピノザはXXI 13.14;15.7;15.20;19.14にも言及されている。
- 34 この「執事」はカントの友人で、彼の晩年に付き添ったヴァジアンスキのこと（英訳 p. 281、注129参照）。ここに挙げられたその他の人物は、カントと昼食を共にした招待客である。
- 35 スピノザの著作には件の表現はない。むしろこの表現はマールブランシュ（Nicolas de Malebranche, 1638-1715）のもので、実際カントは『可感界と可想界の形式と原理』（1770）、第4章、第22節でマールブランシュの言葉として次のラテン語を引用している。“Nempe nos omnia intueri in Deo”（AA II 410.15f.）。「つまりそれは、われわれは一切を神のうちに見るというものである」、『カント全集』3、岩波書店、2001、p. 371、1-3。
- 36 仏訳p. 345の注451参照。
- 37 英訳に従い、動詞“presents”（示す）を補って訳す。
- 38 この行の冒頭の文字は消されていて解読不可能。XXI 19の校訂注参照。
- 39 スタティウス『テバイド』、II 35-40。スタティウスは古代ローマの詩人。仏訳p. 346、注452参照。
- 40 カントの手書き草稿に間隙があるのでアカデミー版（XXI 21.27）では空白となっている。
- 41 英訳に習い、アカデミー版にはない“enthaltten”（含む）を補って訳す（XXI 22.3-6）。
- 42 エーネジデムスについてはAdickes, 1920, p. 621参照。
- 43 カントは第一束、第二紙葉、二頁を書き尽くした後に、その頁の余白にさらに考えを書き綴った。
- 44 XXI 23.17f.;32.10f. などでも「超越論哲学の最高の立場」に言及されており、晩年のカントの思想とシェリングの『超越論的観念論の体系』（1800）との関連性を指摘する研究者もいる。
- 45 古代ローマの風刺詩人ユベナル（Decimus Junius Juvenal, 67-130）の風刺詩からの引用。“Hoc volo, sic iubeo! Sit pro ratione voluntas! - Das will ich, so befehle ich's! Statt einer Begründung gelte mein Wille!” カントはAA XXI 28.4にも同じ箇所を引用している。
- 46 引力と経験の可能性の類推と、光を視覚で捉える部屋（空間）における光と視覚の類推の二重を意味する（仏訳p. 346、注463参照）。
- 47 アカデミー版の校訂注に従い、「直観の産物」を補って訳す（XXI 26）。
- 48 「認識の木」については、『純粹理性批判』B29参照。
- 49 XXI 23.23. ここでは、因果関係に左右されない意志の自由の可能性に言及されている。
- 50 「表象される」という言葉は原文にないが、アカデミー版編者の補足に従って訳出する。XXI 28の校訂注参照。
- 51 原文では文章が不完全で、最後の部分が欠けている。
- 52 XXI 30.13f.参照。
- 53 アカデミー版編者の校訂注によると、このカントの原注（*）の文章は途絶しており、閉じる丸括弧とそれ以下が欠けているが、カントはドイツ語の“als”「として」をラテン語で“tanquam”あるいはまた“ceu”と言い換えることができることと記したのであろう。西訳に習い、“puede significar”「意味することができる」を補い、ここでは上のように意識した。
- 54 西訳の注54（p. 731）では当該箇所のDidoに関して、シラーの同名の詩の結末部分との関連が指摘されている。ウェルギリウスの『アエネーイス』をシラーは翻訳したが、その中にDido（カルタゴの女王）の死の場面の描写の翻訳がある。
- 55 原文途絶。ここに「世界」を補い、「神と世界に分けられる」と読むのが妥当か。
- 56 原文は不完全である。
- 57 シュルツェ（Gottlob Ernst Schulze, 1761-1833）が1792年に匿名で出版した書物のタイトルを指す。当該書は、ラインホルトの「根元哲学」とカントの「批判哲学」を懐疑論の立場から批判し、ドイツ観念論の成立にも影響を与えた。

【訳者解説】

本稿の表題の『オプス・ポストゥムム』(Opus postumum)は、ドイツの哲学者イマヌエル・カント(1724-1804年)が遅くとも1796年頃から1803年までに執筆したと考証されている、生前未公開の膨大な草稿群の総称である。

『オプス・ポストゥムム』は、全部で13の束(Konvolut)から成るが、それらの束はプロイセン科学アカデミー版カント全集(本稿では「アカデミー版」と略す)ⁱの第21巻(1936年)と第22巻(1938年)に分冊されるかたちで収録されているが、執筆順に編集されているわけではなく、便宜的に付された番号の若い順に従って編まれている。例えば、執筆時期が最も遅い第一束は全集第21巻の3-158頁に、その次に執筆時期が遅い第七束は全集第22巻の3-131頁に収められている。しかも『オプス・ポストゥムム』は、単に分量が多いというだけではなく、微妙に表現を変えながらもほぼ同じ内容が繰り返し述べられていることも多い。その一方で、ときにはそれ以前の記述とは正反対の哲学的主張が開陳されている箇所さえ散見される。加えて『オプス・ポストゥムム』全体にわたっておよそ学術的とは言い難いメモのような覚え書きも含まれ、文章として途絶している箇所なども間々見受けられる。

こうした事情も相俟って、欧米における『オプス・ポストゥムム』の翻訳は、いずれも抄訳にとどまっている。具体的には、フランス語訳(1950年ⁱⁱ、1986年ⁱⁱⁱ)、イタリア語訳(1963年^{iv})、スペイン語訳(1983年^v)、英語訳(1993年^{vi})のいずれもが抄訳である。しかしながら、私的な覚え書きも人間カントを知るための貴重な資料であり、正反対の叙述のどちらをカントの真意として受け取るかによって自ずと解釈も異なってくるし、草稿であるがゆえにカントの逡巡のありさまを如実に看取することもできる。

そこで、われわれは『オプス・ポストゥムム』の抄訳ではなく、あえて全訳を目標に、その一部をかつて本紀要(第52巻、143-157頁)にて公開した。当該訳は全集では第十束に分類されており、われわれもその表記に従ったが、内容からして明らかに第七束に分類されるべきものである。同様に、第一束に分類されるべき草稿が第七束に部分的に紛れ込んでいることも判明している。

今回われわれは、カント晩年の1801年以降の第一束に属する草稿の一部、具体的にはAA XXI 3-32の訳出を行った。このうち、冒頭のAA XXI 3-8は、それ以外の箇所とはかなり性格を異にしたものとなっている。すなわち、当該箇所は厳密に言うと、第一束として纏められた十二枚の紙葉を包んでいた「包み紙」(Umschlag)を指し、その紙にさえもカントは死の前年の1803年に、私的な覚え書きを断片的に書きつけていたのである。つまり、「包み紙」は『オプス・ポストゥムム』全体の中でも最も執筆時期の遅い草稿と考証されているのである。齢八十に近づき、健康状態が悪化しつつある最晩年のカントが「包み紙」に書き残した覚え書きは、それゆえ訳出に際して最も難渋した部分であり、それを全訳するのは本邦初である。偉大な哲学者であるカントの、80年以上未邦訳のテキストを訳出し、公表することにはきわめて大きな意義があるだろう。

一方、1801年の草稿と考証されているAA XXI 9以降の草稿では、「超越論哲学の最高の立場 [= 観点]」という文言が頻出することになる。あえて一般的な哲学史観点から言えば、「理論哲学」と「実践哲学(= 道徳哲学)」を統一しえなかったことがカント哲学の急所であり、ドイツ観念論誕生の機縁でもあった。こうした理論・実践哲学の両部門の統一を企図し、『オプス・ポストゥムム』の第一束でカントが開陳したもののこそ「超越論哲学の最高の立場」にほかならない。しかし、まことに残念ながら「超越論哲学の最高の立場」の内実として繰り返し述べられるのは、「神」「世界」そして両者を結合・合一する媒介的存在である「人格」または「道徳的存在者」としての「人間」という文言にとどまる。換言すれば、いかにしてそうした人間存在が世界と神の「媒介者」たりえるのかといった構造の原理的説明にまでには及んでいないように

訳者には思える。

とは言え、『オプス・ポストゥムム』第一束においては、上述の問題に加え、スピノザ（主義）やリヒテンベルク（1742-1799）、さらには今日シュルツェ（1761-1833）の書として知られる『エーネジデムス』への言及が数多く見受けられる。スピノザ（主義）とリヒテンベルクに関しては、カントが積極的に評価して自身の体系構想に取り入れようとしたのか否かは研究者によって意見が分かれるところであり、今なお論争が続いている。あるいは、スピノザ（主義）と『エーネジデムス』は、いわゆるドイツ観念論の思想形成にも大きな影響を与えたという意味でもきわめて重要であり、最晩年のカントがそれらについて、たとえ草稿であり不完全な文章が多いとしても、どのような見解を抱いていたのかを理解するためにも本翻訳は重要な資料となりえると訳者は確信している。

付記：本稿はJSPS科学研究費（課題番号：22K00021）の助成を受けたものであり、ここに謝意を表する。

注

- i Immanuel Kant: *Gesammelte Schriften*, hg. von der (Königlich) Preußischen Akademie der Wissenschaften und ihren Nachfolgern, Berlin, 1900ff. (AAと略記) この全集の巻数をローマ字で、ページ数をアラビア数字で表す。ページ数の後のピリオドの後の数字は当該ページの行数を表す。本稿は、同全集の第21巻3ページ1行目から32ページ8行目までを訳出したものである。
日本語訳文の中の【 】で囲まれた数字はこのAA第21巻のページ数を指す。AAの原文でゲシュペルトで強調されている部分（カントの手書き草稿で下線が引かれている部分）は、日本語訳の上に傍点をつけた。原文太字の箇所（カントの手書き草稿で二重下線が引かれている箇所）は日本語訳でも太字にした。原文のラテン語は原則として日本語訳と並記して訳文に残した。原文に付記されたカント自身による注は*で翻訳文に挿入した。翻訳者による注はアラビア数字で示し、文末脚注として最後にまとめた。訳文中の翻訳者による補足は〔 〕で示した。
- ii Emmanuel Kant: *Opus postumum*, textes choisis et traduits par J. Gibelin, J. Vrin 1950.
- iii Emmanuel Kant: *Opus postumum, passage des principes métaphysiques de la science de la nature à la physique*, traduction, présentation et notes par François Marty, Presses Universitaires de France 1986. われわれが参照したのはこの仏訳である。（本翻訳の注では「仏訳」と略記）
- iv Immanuel Kant: *Opus postumum*, intr. e trad. di V. Mathieu, Biblioteca Universale Laterza 2004 (1963).（本翻訳の注では「伊訳」と略記）
- v Immanuel Kant: *Transición de los principios metafísicos de ciencia natural física (Opus postumum)*, edición de Félix Duque, Ediciones de la Universidad Autónoma de Madrid 1991 (1983).（本翻訳の注では「西訳」と略記）
- vi Immanuel Kant: *Opus postumum*, edited, with an introduction and notes, by Eckart Förster, translated by Eckart Förster and Michael Rosen, Cambridge University Press 1993.（本翻訳の注では「英訳」と略記）

キーワード：カント、オプス・ポストゥムム、超越論哲学、超越論的観念論、神と世界、人格としての神、神の存在証明、定言命法